

ニホンオオカミの像



ニホンオオカミの像

ニホンオオカミの肖像

久保田 忠和 (故)

具像の彫刻は、モデルがあってこれを観察して作るのがごく一般的である。勿論、単にモデルの形を再現するのではなく、制作者の作意によってそれは彫刻化されるわけである。

だが、ニホンオオカミは今日その姿を見ることは出来ないから、他のオオカミや文献などによって、まずはモデルを作らなければならなかった。この心像をモデルにしてポーズを決め制作したわけである。資料によってこれがニホンオオカミの形だといえるどんな小さな部分もおろそかにできなかった。

モデルを彫刻化することは無意識のうちにも働く神経だが、当然のことながらこの像に私の彫刻性を強く押し出すことはなかった。

この像は、等身大のブロンズ製であり、いわばニホンオオカミの肖像である。



制作者 ■ 故 久保田忠和氏
昭和2年 和歌山県生
奈良教育大学教授
社団法人 二紀会会員

ニホンオオカミ像建立にあたって

自然環境の変化や人間の文化圏のひろがりにより、多くの野生動物が地球上から姿を消してしまった。ニホンオオカミも今日では、わずかに残る剥製^{はくせい}や骨格からその姿を想像するにすぎない。

明治38年(1905年)当村において捕らえられた若雄^{おす}のニホンオオカミが最後の捕獲の記録となった。当時、ここ鷲家口の宿屋芳月楼で地元の猟師から、英国より派遣された東亜動物学探検隊員米人マルコム・アンダーソンに8円50銭で買い取られ大英博物館の標本となっている。

この標本には、採集地ニホン・ホンド・ワシカグチと記録され動物学上の貴重な資料として永く保存されるところとなった。

かつて台高の山野を咆哮^{ほうこう}したニホンオオカミの生存にかすかな夢を託して、雄姿を像にとどめ、ひろく自然の愛護^{ねが}を希い、村の文化史を彩る貴重な遺産としたい。

昭和62年3月

東吉野村



愛情と理性に富んだ共同生活！

—オオカミとは—

オオカミは、食肉目イヌ科に属し、イヌ、キツネ、タヌキ、ジャッカルと同じなかまです。ライオンがネコ科の代表であると同様にオオカミはイヌ科の代表です。生息地は北半球の北部のヨーロッパ、アジア、アメリカの各大陸にわたっていますが、最近では生息数が急減しています。一番多くいるところは、年平均気温が0℃から10℃の寒冷地で、体は7cmもある綿毛で覆われています。

口先がとがっており肢が長く、耳が立っていて、尾は垂れて軽快なやせ形です。時速40kmぐらいで70kmもの長距離を走って獲物を追ったりします。首を伸ばし口をあげて長い遠吠えをする特有な啼き方をすることがあり有名です。

穴を居住とし永久的な一夫一婦の家族生活をするといわれます。また、獲物を追うときは、群れを作り助けあって共同生活をいとなんでいます。

オオカミは、昔話やことわざの中に恐い動物として登場しますが、その内容を調べてみると、オオカミの姿や習性をよく知らずに幻想として作られた話が多いようです。またオオカミを恐れながら一方では、彼らに愛着と尊敬の心を抱きつけてきたようです。



◀最後に捕獲されたニホンオオカミの頭骨と毛皮(大英自然史博物館)



魅る 幻のニホンオオカミ

こつ然と姿を消したニホンオオカミ

—ニホンオオカミとは—

日本には2種類のオオカミがいました。1種は北海道のエゾオオカミ、もう1種は本州、四国などに生息していたニホンオオカミです。

ニホンオオカミは、学名 *Canis hodophilax* といい、現在実物標本の3体が日本に保存されています。

また、オオカミの中で一ばん小さい種で、4肢と耳が短いですが、それでもイヌにくらべればはるかに大きく、体毛は長く、前肢前面に黒褐色の斑紋があります。頭骨は短小で口先は短く広いのが特徴です。

明治の初めまではかなりの数が生息していたようですが、エゾオオカミと相前後して姿を消してしまったのです。その後各地でニホンオオカミの生存を伝える情報がありましたが、生存を裏付ける証拠もなく、本村が最後の捕獲地となってしまいました。

ニホンオオカミは古来から人畜に害を与えず、シカなどを獲物に

して生きてきました。なぜ姿を消してしまったかは、今なお解明されておりません。

最後に捕獲されたニホンオオカミ、海を渡り大英自然史博物館へ

明治38年(1905年)1月23日、本村の鷺家口において、米人マルコム・アンダーソンが入手したニホンオオカミの経緯を回想すると――。

アンダーソンは、イギリスの有名な貴族、ベッドフォード公の出身で、ロンドン動物学会と自然史博物館とが企画した東亜動物学探検隊員として、明治37年7月来日。まだ25才の青年でした。そして通訳を兼ねた助手として雇われた当時第一高等学校の学生、金井清氏と共に、明治38年1月11日、奈良県庁で狩猟許可を得て、桜井を経て13日から当村の鷺家口の芳月楼という宿屋に泊まっていた。23日の朝、採集したネズミをはく製にしていたら、3人の猟師が1頭のニホンオオカミの死骸を持ってやってきました。この時、猟師は十数円を要求しましたが、金井氏は8円50銭を主張しました。

日当りのよい宿屋の縁側で、長い間交渉しましたが、ついにまともならず、猟師たちはオオカミをかついで立ち去ってしまいました。

「この時のアンダーソンの失望は言語に絶するものだった。元来無口のアンダーソンが、買えばよかった、再び手に入らないかもしれないと独り言をいいながら片足を立てて縁側に腰かけた顔は今日も、ありありと残っている。」と金井氏は当時の模様を記しています。ところが金井氏の期待にたがわず、猟師たちはやがて引き返してきて8円50銭で折り合い、オオカミは売り渡されました。

「これが、日本で捕獲された最後のニホンオオカミになろうとは、当時、想像も及ばないことである。アンダーソンと共に、鋭利なナイフで皮をはいでいる間、3人の猟師は煙草を吸いながら眺めていた。腹がやや青みを帯びて腐敗しかけているところからみて、数日前に捕れたものらしい。」と金井氏は記しています。

このニホンオオカミは、若い雄で、現在も自然史博物館に、頭骨と毛皮が保存されています。その大きさは、頭と胴91.4cm、尾34.0cm、耳8.6cmと記録されています。

ちなみにアンダーソンは鷺家口において、この他にイノシシを3円50銭、シカの皮を4円45銭、カモシカ2頭を9円50銭、その他、タヌキ、イタチ、ムササビ、モモンガ、リスなどを購入し、1月26日名古屋へむけて出発したと記録されています。

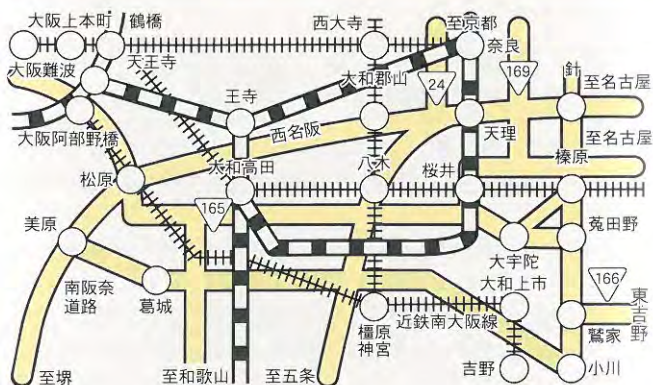
▼最後に捕獲されたニホンオオカミの頭骨(大英自然史博物館)



東吉野村位置図



交通のご案内



発行 ■ 東吉野村教育委員会

奈良県吉野郡東吉野村 〒633-2492 ☎0746-42-0441

東吉野村ホームページ <http://www.vill.higashiyoshino.nara.jp/>